

自動詞、他動詞の識別にかかわる形態的てがかり ——一段活用動詞を中心として——

福 島 直 恭

1. 問題の設定

小稿は、談話中に現れる動詞の形態が、その動詞が自動詞であるか他動詞であるかを理解するためにどの程度役立ち得るのかという問題についての考察である。

動詞の自他を識別するにあたっては、その動詞自体の形態と、その動詞に伴って現れる補語の数や種類が重要な手がかりになるものと考えられる。しかし後者の統語的な手がかりについては、小稿の筆者は、福島(1996)において、日常的な会話資料を調査した結果、口頭言語では、自動詞にしる他動詞にしる、いわゆる必須補語(自動詞であれば「ガ格名詞句」、他動詞であれば「ガ格名詞句」と「ヲ格名詞句」)であっても、格助詞を伴って現れる例の方がはるかに少ないし、格助詞なしで名詞のみの形でも50パーセント以下の出現率であったことをもとにして、次のように結論づけている。

少なくとも今回調査資料としたような種類の日常的な談話においては、助詞のガの他にヲも出てきたから他動詞だとか、ガだけでヲがないから自動詞だとかというような方向での文の理解は到底不可能であろうと思われる。また、名詞句が2つ、あるいは3つ出てくるのが他動詞で、1つしか出てこないのが自動詞というような処理も無理であろう。

つまり、「書記言語」ならばともかく、「口頭言語」の場合には、動詞と共に起る補語の種類や数という統語的な手がかりは、その動詞の自他の識別のためには、ほとんどあてにならないということである。そうだとすると、もう一方の動詞自体の形態的な手がかりが、どの程度役立つものなのかということが次に問題になってくる。

さらに福島(1996)では、形態的、意味的、構文的に対応する相手を持ついわゆる有対自動詞と有対他動詞について、それらの自動詞と他動詞のペアの形態的な対応パターンには、どのようなものが何種類くらいあるのかという点に

関する調査を行っている。その結果、日常の会話によく現れるような有対自動詞と有対他動詞の形態的な対応パターンはそれほど多いものではなく、例えば「終わる」：「終える」のように自動詞の ar：他動詞の e という形で対応しているグループと、「出る」：「出す」のように自動詞の er：他動詞の as という形で対応してるグループの上位 2 グループだけで全体の 50 パーセント以上を占めており、上位の 7 グループまで広げれば全体の用例の約 93 パーセントをカバーしているという結果を得ている。

しかし、福島 (1996) での考察の限りでは、例えば上の「出る」：「出す」の対応においては自動詞の指標となっている er が、別の対応においては他動詞のグループの指標となっているというような場合があり、「こういう形を持つ動詞は常に自動詞 (あるいは他動詞) である」というような、明確な形態的特徴をあまり指摘できていない。先に福島 (1993) でも同様の主張を行っているが、サ行五段活用動詞は、他動詞であることを形態的に表示しており、上一段活用動詞は自動詞であることを形態的に表示していることを述べたにとどまっている。

そこで小稿の目的は、「サ行五段活用ならばそれは他動詞である」というのと同様の、自他の識別に関する形態的な手がかりを、より多くの動詞について見出すということである。考察の範囲は、福島 (1996) と同じく、一般的、日常的な口頭言語に普通に現れるような現代日本語の動詞とする。その中でも小稿では特に、下一段活用動詞の形態と自、他の関係について追求するものである。

2. 二つの前提

前節で述べたような問題についての考察を行うにあたって、小稿では、次の①、②の 2 点を前提とすることを述べておく。

① 文、あるいは談話の理解にとって、文中に現れる動詞が自動詞なのか他動詞なのかということを知覚することは、必要、あるいは有効な過程である。

② ①のような処理を行うような心的過程は一種類ではない

①と②について若干の補足説明を加えておくと、まず①の中で「自動詞なのか、他動詞なのかを識別する」というのは、より具体的にいえば、その動詞が、必要とする補語として動作主だけを要求する動詞なのか、動作主の他に動作の対象とか、さらには対象の移動先なども必須補語として要求する動詞なのかを判定するということである。この処理は文中の述語以外の他の要素の文中にお

ける役割りを確定する基礎になっているものと思われる。

また、現れた動詞が自動詞か他動詞かを識別する処理は、必ずしもその動詞が何という動詞であるのかという同定が行われた後にしかできないということはない。まず先に自他の識別が行われて、その後その結果も参照して動詞の同定が行われるという方向での処理が可能な場合もあるはずである。これが②の前提の内容である。例えば先にも述べたように、サ行五段活用動詞はほとんどが他動詞だし、上一段活用動詞はほとんどが自動詞なので、これらの活用をする動詞は、その活用の種類が分かれば、その動詞は何という動詞なのかがわかる前に、自他の識別が可能になるということである。もちろんそれとは逆に、動詞の同定が先行して、「これは何々という動詞である。だから自動詞（あるいは他動詞）である」という方向での処理も当然あるのであって、この問題に限らず、言語の認知的処理には複数の過程が用意されていて、人間はそれらを必要に応じて使い分けしているということができようであろう。ただし、動詞の自他の識別に関していえば、それがその動詞の同定より先に行われるようなタイプの処理の方がより効率的な処理ということができると思われる。それは逆にいえば、このような方向での処理が可能となるように、言語体系の側にいくつかの手がかりが用意されていることを予想させるものである。結局、小稿の目的は、言語の側に用意されているそのような手がかりを見いだすことだということができる。そして、結論を先取りしてしまえば、そのもっとも有力な手がかりは、少なくとも一段活用動詞に関しては、動詞の活用に関わる動詞自体の形態にあるということ述べようとするものである。

3. 資料

小稿で使用した談話資料は、福島（1996）と同一の資料で、テレビのトーク番組（フジテレビ「笑っていいとも」の「テレフォンショッキング」のコーナー）における、司会者タモリとゲストとの間で1対1で行われる、約10～15分程度の会話を録画したビデオ、およびそれを文字化したものである²⁾。テレビのトーク番組を資料として使用する談話研究では、テレビ番組であるという特殊な状況を十分考慮する必要があることはいうまでもない。しかし小稿は、自動詞と他動詞の現れ方に関して、量的な観点からのアプローチを行うために談話資料を用いたものであって、話し手や聞き手の社会的属性の違いや、発話場面の特殊性などによる言語使用の実態を追求しようという方向の研究ではないので、この点の問題は比較的影響が少ないものと考えられる。

また小稿が、網羅的、辞書的な動詞のリスト（既存のそのようなものは主に「書き言葉」から収集したと思われる）を調査対象としなかったのは、より効率的な言語処理は、あくまで日常的、一般的な会話を想定して、その処理システムが設定されていると考えたからである。つまり、口頭言語において普段高い頻度で現れる語を、どのように効率的に処理していくかということが重要なのであって、網羅的な動詞のリストを調査対象としたのでは、毎日何回も出会う語も、一生に数回しか処理の対象にならないような語も、同じ扱いをしてしまうことになるからである。

4. 調査手順と留意点

小稿は、日常の一般的な口頭言語において、発話中に現れた動詞が自動詞であるか他動詞であるかということが、どのような手がかりによって聞き手に理解されるのかという点を考察の中心に据えている。そしてその手がかりとして、特に、自動詞と他動詞との間の形態的な違いの存在の意義を解明しようとするものである。そこで日常的な会話によく出現するような動詞について、その活用の種類（五段活用、一段活用）や活用する行（語幹末の子音）、および活用形に注目して調査を行った。

出現位置の違いは区別せず、談話資料中に現れたすべての動詞を自動詞と他動詞に分け、さらにそれぞれを「有対自動詞」と「無対自動詞」、「有対他動詞」と「無対他動詞」に分類した。動詞の自他の分類基準は、その動詞が、ヲ格名詞句として「対象」を表す補語を取り得るかかどうかという点である。

また、「有対動詞」とは、例えば自動詞「通る」と他動詞「通す」のように、形態的、意味的、構文的に対応する相手を持つ自動詞や他動詞のことで、「無対動詞」とは、「有対動詞」以外の動詞のことである。

動詞の出現数のカウントに際して、あるいは自動詞と他動詞、有対動詞と無対動詞の分類に際して、いろいろと問題となりそうな例があったが、小稿ではそれらの例に関しては、ほぼ福島（1996）での基本方針に従って処理した。具体的には、

- ・複合動詞とする範囲は広めにとり、それら複合動詞はすべて一語として処理する。
- ・自動詞と他動詞の対応が一对多の関係にあると思われる場合、すなわち
「向く」：「向ける」 「向かう」：「向ける」
などのような場合は、「向く」と「向かう」をともに有対自動詞として、

「向ける」を有対他動詞とする。

- ・ 自他同形の動詞は用例数がわずか一例（「ひらく」）だったのですべての統計から除外する。

などである。

5. 調査結果と考察

5-1. 上一段活用動詞

本節では、談話資料中に現れたすべての動詞のうち、上一段および下一段に活用する動詞に関して、活用の種類や語幹末音節の子音の種類と、その動詞が自動詞か他動詞かということとがどのように関係しているのかについて考察する。ただし、今回の談話資料に現れた一段活用の動詞の数が多いため、便宜上、まず有対自動詞と有対他動詞についての調査結果を示し、つぎに同様の傾向が無対自動詞や無対他動詞にもあてはまるかどうかを考えていくという手順で説明していく。

まず、上一段活用であるが、今回の調査資料の中に現れた上一段活用の有対動詞はつぎにあげる5語だけであった。

「起きる」「過ぎる」「落ちる」「伸びる」「降りる」

すべてが自動詞であり、のべ使用数は27であった。無対の上一段活用動詞の中には「見る」「着る」「浴びる」などの他動詞もでてくるが、「見る」と「着る」は上二段活用→上一段活用という歴史的变化を経たグループに属する語ではなく、語幹が一音節であるという点で「起きる」「過ぎる」…などの語とは形態的な相違を持っているということでこの2語を除外すれば、日常会話によく使われるような上一段活用動詞はほとんどが自動詞であるということが明らかである。

ただし、ここで「上一段活用」だとか「自動詞」であるとかいうのは、あくまで説明の便宜上、その用語を使用しているだけである。実際の言語処理においては、例えば「上一段活用動詞」というのは、「た」や「て」に続く場合に、「～きた」「～ちて」などのような形で現れる動詞だとか、否定の「ない」続く場合に、他の活用の動詞とは違って「～びない」とか「～りない」などのような形で現れる語として認識されているはずである。そして、そのような動詞（句）が談話中に現れた場合は、それらは必須補語として動作主だけを要求する動詞であるということがわかるということである。以下、小稿で～行下一段活用だとか、～行五段活用だとか、あるいは未然形、連用形…などという場合

があっても、また自動詞とか他動詞とかいう用語を使っている、決して実際の言語処理の場において、「これは～行下一段活用だから他動詞であるとかその蓋然性が高い」という認識がまず生じるというのではない。「これは『～べない』だから、あるいはこれは『～けて』だから必須の項を二つ要求しているはずだ」という方向での処理が行われているということ、小稿では「～行下一段活用だから他動詞であるとかその蓋然性が高いものとして処理が行われている」と表現しているに過ぎない。

5-2. 下一段活用有対動詞

次に下一段活用動詞に関して述べる。まず有対動詞で自動詞か他動詞のどちらかが下一段活用であるようなペアを、下一段動詞の方の活用する行を基準として分類すると次の〈表1〉のようになる。

この表は、例えばカ行に活用する有対の下一段動詞としては、カ行五段に活用する自動詞（「付く」など）のグループと対応する「付ける」などをはじめ

〈表1〉 下一段活用の有対動詞出現数 異なり語数／のべ出現数

	有対他動詞	有対自動詞
ア	☆ア行下一段（変える） 4/12 〈サ行五段〉（増やす）	〈ラ行五段〉（変わる） ☆ア行下一段（増える） 2/10
カ	☆カ行下一段（付ける） 5/19 ☆カ行下一段（助ける） 5/13 ☆カ行下一段（分ける） 1/1 〈カ行五段〉（焼く） 〈サ行五段〉（負かす）	〈カ行五段〉（付く） 〈ラ行五段〉（助かる） ラ行下一段（分かれる） ☆カ行下一段（焼ける） 2/14 ☆カ行下一段（負ける） 2/4
ガ	☆ガ行下一段（上げる） 2/2	〈ラ行五段〉（上がる）
サ	☆サ行下一段（乗せる） 2/5	〈ラ行五段〉（乗る）
タ	☆タ行下一段（立てる） 2/6 ☆タ行下一段（当てる） 1/13	〈タ行五段〉（立つ） 〈ラ行五段〉（当たる）
バ	☆バ行下一段（並べる） 1/2	〈バ行五段〉（並ぶ）
マ	☆マ行下一段（決める） 9/34 〈サ行五段〉（冷ます）	〈ラ行五段〉（決まる） ☆マ行下一段（冷める） 1/2
ラ	〈ラ行五段〉（取る） 〈サ行五段〉（流す） 〈マ行五段〉（生む）	☆ラ行下一段（取れる） 5/12 ☆ラ行下一段（流れる） 6/15 ☆ラ行下一段（生れる） 1/14

として、他動詞のグループが3種類と、カ行五段に活用する他動詞（「焼く」など）と対応する「焼ける」などをはじめとして、自動詞のグループが2種類の、合計5つのグループがあることを表している。また、例えば「付ける」のグループの5/19の数字の意味は、「付ける」のグループの方には、「付ける」という語を含めて5つの他動詞があり、のべ使用例数は19回ということである。少なくとも有対の動詞の語幹末の音節⁵⁾ ke が、その動詞が他動詞だとか自動詞だとかを形態的に表示していることにはならないということがわかる。

ところが、ガ行、サ行、タ行、バ行に関しては、カ行とは少し事情が違っている。これらの行に活用する下一段動詞、つまり語幹末に ge、se、te、be という音節を持つ合計8語28例は、すべて他動詞である。また、マ行下一段活用の有対動詞も「決める」「止める」など9語34例までが他動詞で、自動詞は「冷める」の一語（2例）のみしか現れなかった。

これとは逆に、ラ行の下一段有対動詞は、ラ行、サ行、マ行五段活用の他動詞とペアをくむ自動詞ばかりで、合計12語41例が現れた。

下一段活用の有対動詞にみられるこのような自、他に関する偏りは、おそらく「聞き取り」という情報処理に際して、プラスの効果を持っているものと考えられる。つまり、その動詞がガ行、サ行、タ行、バ行、マ行の下一段活用であることがわかれば、それは必須補語として動作主の他に少なくとももう一つの補語を要求している動詞である、あるいはその蓋然性が高いということであり、ラ行の下一段活用動詞だとすれば動作主だけを必須補語とする動詞であるとかその蓋然性が高いという前提で処理できるからである。ただし、今までみてきたのは有対動詞ばかりであったが、単語の同定とか必要とする補語の数などの確定に先立って、当該の動詞が有対動詞か無対動詞かということがわかるような処理が行われると考えることはむしろ不自然であろう。上のような偏りは、有対無対をとわずすべての動詞についていえることが明らかにされて、はじめてその「聞き取り」におけるプラスの効果が期待できるものといえるであろう。そこで次節では、有対動詞について見いだされた偏りが無対動詞にもみられるかどうかを検討することにする。

5-3. 下一段活用無対動詞

次の〈表2〉は、前節の〈表1〉と同様の調査を下一段活用の無対動詞に関して行った結果を示したものである。

この表から分かるように、無対動詞では、ア行、ガ行、タ行、ナ行、バ行、マ行の下一段活用動詞がすべて他動詞か、あるいはそれに準じるような状態で

〈表2〉 下一段活用無対動詞の活用する行と自他

無対他動詞		無対自動詞	
ア行下一段 (考える)	12/43		
カ行下一段 (預ける)	7/10	カ行下一段 (駆けつける)	5/6
ガ行下一段 (投げる)	5/11		
サ行下一段 (見せる)	1/11	サ行下一段 (やせる)	1/17
タ行下一段 (捨てる)	2/6	タ行下一段 (ばてる)	1/2
ナ行下一段 (兼ねる)	2/6	ナ行下一段 (寝る)	1/7
バ行下一段 (しゃべる)	2/32		
マ行下一段 (諦める)	4/1		
ラ行下一段 (忘れる)	3/58	ラ行下一段 (暮れる)	9/20

あった。カ行は他動詞が6語9例、自動詞が5語6例と有対動詞の分布の仕方と似ているように見えるが、自動詞の5語のうち4語が「駆けつける」「話しかける」などの他動詞を後部形成素とする複合語である。残りの一例は「怠ける」で、これは小稿では一応自動詞に分類したが、「仕事を怠ける」などの表現を認めれば他動詞ともいえる動詞である。また、ラ行下一段活用の動詞は自動詞が9語で他動詞が3語現れた。これら下一段活用の無対動詞に関する調査結果を、5-2の〈表1〉に示した下一段活用有対動詞の結果とあわせたものが次の〈表3〉と〈表4〉である。

〈表3〉は、下一段活用の動詞の自他の別を、無対、有対それぞれに合計したもの、および無対と有対を合わせた数を示したものである。有対の他動詞の欄の32/107という数字は、異なり語数が32語で、それらののべ使用数の合計が107という意味である。また、無対動詞の合計欄にある()内の数字は、「走れる」や「食べれる」などの下一段活用の可能動詞を含めた場合の数である。この表を見ただけでは、下一段活用動詞というものは、他動詞が自動詞の

〈表3〉 下一段活用の他動詞数と自動詞数

	他動詞	自動詞
有対動詞	32/107	19/80
無対動詞	38/178 (66)/(221)	17/43 (26)/(61)
計	70/283 (98)/(328)	36/123 (45)/(141)

〈表4〉 下一段活用動詞の活用する行と自他

他 動 詞	自 動 詞
ア行下一段 24語 -e: 57 -eru: 13	ア行下一段 2語 -e: 8 -eru: 2
カ行下一段 20語 -ke: 38 -keru: 14 -kere: 2	カ行下一段 13語 -ke: 22 -keru: 7
ガ行下一段 7語 -ge: 9 -geru: 4	
サ行下一段 4語 -se: 4 -seru: 2 -sere: 1	サ行下一段 1語 -se: 16 -seru: 1
タ行下一段 6語 -te: 14 -teru: 13	タ行下一段 1語(バテる) -te: 2
ナ行下一段 2語 -ne: 6	ナ行下一段 1語(寝る) -ne: 1 -neru: 1
バ行下一段 3語 -be: 23 -beru: 10 -bero: 1	
マ行下一段 18語 -me: 50 -meru: 9 -mero: 1	マ行下一段 1語 -me: 8 -meru: 3
ラ行下一段 9語 -re: 51 -reru: 17	ラ行下一段 28語 -re: 52 -reru: 17

2倍かそれ以上を、のべ語数としても異なり語数としても占めるものであるということ以上はいえそうにない。

しかし、〈表4〉のように、それを活用する行に分けてみると、自他に関する著しい偏りがあることがわかる。つまり、下一段活用の自動詞⁷⁾といっても、それは大半がラ行かカ行に活用するものに限られているのであって、その他の行の下一段動詞はほとんどが他動詞であるということである。逆にラ行下一段動詞は自動詞が優勢であるといえるであろう。カ行下一段動詞も他動詞がかなり優勢ということではできるかもしれない。前節の最後に述べた、この分布の偏りが「聞き取り」という処理にもたらすプラスの効果は、少なくともカ行、ラ

行下一段動詞以外については成立するように考えられるであろう。つまり、例えば「～べて」とか「～てた」とか「～げよう」とか「～める(体言)」などという動詞句が出てきたら、それは必要な補語として2つ、あるいは3つの名詞句をとるものとして処理すればよいということである。

ところで、ラ行五段活用動詞で、語幹末にエ列音を持つ動詞(ex「すべる」)は、下に示すように、下一段活用動詞(ex「たべる」)と形態的な重なりが大きいようにみえる。

すべらない すべります すべって すべる すべる人 すべれば すべれた
たべない たべます たべて たべる たべる人 たべれば たべろ
もしこのような五段活用自動詞の終止・連体形や仮定形が談話中に数多く出現するとしたら、「～べる(名詞)」とか「～べれば」だから他動詞であるという
ような処理にとっての例外が増えるのではないかと思われる。しかし、今回調査した資料の中
に出現したものは、自動詞の「しゃべる」「帰る」「減る」の3語だけである。さら
に、動詞の活用形のうち、終止・連体形や仮定形の出現頻度はあまり高くはなく、今
回の調査でも、終止・連体形と仮定形を合わせても、全体の約25パーセント程度を
占めるに過ぎない。よってこれらの例外的な形は、それほど障害になるとはいえない
ものであろう。

ところで、この語幹末にエ列音を持つラ行五段活用動詞が少ないという事実は、
小稿の主張を裏から支えるものとも考えることもできるかもしれない。つまり、一段
活用がもつ、語幹末音節による自他の表示機能を効果的なものにするために、それ
と紛れるおそれのあるこのタイプの五段活用動詞があまり存在しないのであると解
釈することが可能だということである。また、下一段活用動詞に音便形が存在しない
のも、自他の表示機能を持つ語幹末音節を保護するという理由によるものだと考
えることもできるであろう。

6. 例外の存在について

前節までの検討をまとめると、下一段活用動詞の形態と自他との関係について、
次のようなことがいえるであろう。

- I. ア行、ガ行、サ行、タ行、ナ行、バ行、マ行に活用する下一段動詞は、他動詞である蓋然性が高い。
- II. カ行に活用する下一段動詞は他動詞が優勢であり、ラ行に活用する下一段動詞は自動詞が優勢である。

小稿では、これまでも何度か述べているように、このような語幹末子音と

自他に関する相関関係、とりわけ I のような一方的な偏りは、「聞き取り」という処理過程にプラスの貢献をするものと考えてきた。しかし、II はもちろん、I のように一方的な偏りといえる分布であっても、そのような分布はあくまで偏りだとか傾向というべきものであって、ひとつの例外もないというものではない。〈表 4〉をみれば、例外的な動詞の存在も確認できる。また、小稿の調査対象は現代日本語動詞の網羅的なリストではなく、合計約 4～5 時間分の談話資料であり、使用頻度が高くなると思われる動詞であっても、偶然今回の資料の中に現れず、しかも I、II に対して例外となるような動詞もあるであろう。

小稿は、言語体系というものが、日常的な口頭言語の場においての、より効率的な処理に対応できるような姿をしているはずであるという観点に立つものである。そのような立場からすると、総体的により円滑な音声言語理解が重要なのであって、まれに例外にぶつかって処理の試行錯誤を強いられることがあったとしても、それがより効率的な処理過程の存在を否定することにはならないと考えている。例えば、日本語のカタカナ表記語の「読み」に関する実験をもとにした研究である広瀬（1984）によると、「スイエイ」という文字列と、「テニス」という文字列とでは、一般の日本人の場合、この両単語を認知する過程が異なっていると述べている。前者は各文字の認知の後に単語の認知に至るのに対して、後者はこの文字列全体の形状等を手がかりとした単語の認知が、各文字の認知に先行するというわけである。もちろんより効率的なのは、つまり実験の場合より認知の速度が速いという結果を得られるのは後者の方である。この後者のような処理方法は、「スイエイ」などのような見慣れない文字列に対しては使用しにくく、そういう場合は各文字の認知の結果をもとに単語の認知が行われるという、比較的効率的ではない処理となる。しかし、「スイエイ」という文字列に出会わない保証はないからといって、後者のより効率的な処理の存在意義がなくなるわけでは決してないのである。この例は視覚の情報処理に関する研究であって、音声言語処理の問題と全く同一視することは危険だが、

- ・複数の処理過程が存在して、より効率的な処理が適用できない場合に、それより効率的ではない処理過程が使用されること
- ・よって、より効率的な処理が適用できない例の存在は、そのままその効率的な処理過程の否定にはつながらないこと

という点では、小稿の参考にできるものと考えられる。

小稿で取り上げた問題でいえば、「より効率的な処理過程」とは、例えば『「～めた」とか「～てない」だから動作主と対象をとる動詞のはずだ』という方向

での処理をさすものであり、「比較的効率的ではない処理」とは『この動詞はなにになという動詞だから動作主のほかに対象も必要とするものだ』というような方向での処理をさすものである。

7. まとめ

従来の多くの言語研究は、言語を自律的で他の要素から独立した体系ととらえて、「言語の使用」ということを軽視しがちなものが多くみられる。それに対して小稿では、言語体系は、なによりも日常の言語使用の場におけるコミュニケーションへの効果的な貢献が可能となるような形をしているはずであるという観点に立っている。つまり、日常高い頻度で出現する言語要素をいかに効率的に処理するかという点が重要で、各言語体系はその要求に応えられるものであるはずだということである。逆にいえば、言語体系の多くの部分は、そのような観点から説明されるべきものだということでもある。

動詞の自他の識別において、その動詞自体の形態がどの程度役立つものなのかというテーマに関して、福島(1996)での結論と小稿の結論とを合わせると、上一段活用、(少なくともカ行、ラ行以外の)下一段活用、サ行五段活用の動詞については、動詞の形態が示す手がかりの有効性を、かなり明らかにすることができた。これは、現代日本語の動詞の活用体系に対しては、日常の言語使用の場において、高い頻度で現れる言語要素に対しての、効率的な処理の可能性という観点からの説明が有効な部分があることを、一段活用やサ行五段活用動詞の例を通して示そうとしたものということである。

前節で〈表4〉を通してI、IIのような結果を得られたのは、日常的な会話を資料としたからであって、仮に動詞のリスト的なものを調査対象とした場合には、ここで明らかになったような重要な傾向性は、非日常的、非口頭言語的な多くの動詞の介在によって、見だしにくくなったものと思われる。

上、下一段活用、サ行五段活用動詞というのは、今回調査した資料をもとにしていえば、異なり語数で計算した場合、出現したすべての動詞のうちの40パーセント強を占めるものである。そして、上一段活用なのに他動詞であるとか、ラ行以外の下一段活用なのに、あるいはサ行五段活用なのに自動詞であるなどという、小稿の考察結果からいって例外となるような動詞の数は21語で、例外の出現率は約10パーセント弱ということになる。つまり、形態を手がかりとした自他の識別は、出現する動詞の40パーセントに適用可能な処理の方法で、そのうち90パーセントには効果的な結果を期待できるということである。

残された問題は、

- ・残りの60パーセントの動詞の大半を占めるサ行以外の五段活用動詞の形態が自他の識別に役立っているのかどうか。
- ・動詞の自他の識別には、形態的な手がかりや統語的な手がかりの他に、どのような手がかりが存在し、それはどのように機能しているのか。

などについて明らかにすることであろう。

注

- 1) 他動詞で二つ以上の必須補語がそろって現れてくる例はさらにごく少数で、有対他動詞のべ出現回数392例のうちわずか4例であった。
- 2) 今回資料とした会話に登場するゲストは次の20人である。
杏里、唐沢寿明、岸田今日子、北沢豪、久我陽子、桜井和寿、高野寛、長山藍子、西村和彦、西村知美、細川俊之、前田吟、槇原敬之、三田佳子、宮本亜門、森高千里、山崎努、Rikako、渡辺徹、渡辺美里
- 3) ここで活用形というのは、例えば五段活用の「書く」ならば、「書か」「書い」「書き」「書く」「書け」というそれぞれの形態のことをいうもので、終止形と連体形や仮定形と命令形の区別はしていない。
- 4) 有対動詞の定義として、この三点を基準とすることに関しては、奥津（1967）、西尾（1978）、須賀（1981）、早津（1987）などに従った。
- 5) 小稿では、例えば「付け・付け・付ける・付ける…」のように活用する動詞を「カ行下一段動詞」と呼び、[つけ]の部分語幹、そのうちの[け]を語幹末音節と表現している。
- 6) 小稿では五段動詞から派生した「書ける」型の動詞も、一段動詞から派生した「食べれる」型の動詞もともに可能動詞という一つの動詞として取り扱った。可能動詞は下一段活用であり、ほとんどすべての五段、一段活用動詞から派生できるため、基本的にラ行以外の一段活用動詞は他動詞である蓋然性が高いとする小稿の結論にとって例外となる場合が多いように思われる。しかし資料に実際に現れた可能動詞では、自動詞なのにカ行一段活用の「行ける」1語だけが例外であった。また、ラ行一段活用は自動詞の蓋然性が高いという傾向に対して例外となるのは、「耐えきれる」「見れる」「計れる」「踊れる」の4語であった。
- 7) <表4>の中で、例えばア行下一段活用他動詞の欄の「-e: 25」という意味は、いわゆる未然形や連用形として出現した例が25であることを示す。次の「-eru: 13」は終止形と連体形の合計数であり、仮定形や命令形は出てこなかったということである。

引用文献

- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形 - 自・他動詞の対応-」
『国語学』 70
- 須賀 一好 (1981) 「自他違い - 自動詞と目的語、そして自他の分類-」『馬淵和
夫博士退官記念国語学論集』
- 西尾 寅弥 (1978) 「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」
『国語と国文学』 55-5
- 早津恵美子 (1989) 「有対他動詞と無対他動詞の意味上の分布」『計量国語学』 16-8
- 広瀬 雄彦 (1984) 「漢字および仮名单語の意味的处理に及ぼす表記頻度の効果」
『心理学研究』 Vol. 55.
- 福島 直恭 (1992) 「サ行活用動詞の音便」『国語国文論集』 21
- 福島 直恭 (1996) 「談話における自動詞と他動詞の現れ方に関する一考察 - 有
対動詞の顕現する格成分及び活用の種類について-」『国語国
文論集』 25

(本稿は1995年度安部能成記念教育基金学術研究助成金による研究成果の一部である)
(ふくしま なおやす 本学助教授)